



三年間続けてきた、この連載ですが、次回を持って卒業をさせていただきます。

2021 年というのはいろいろな意味で大きな節目と思い、次の書き手にバトンタッチの好機と思いました。

あと 2 回のうち今回はあらためて本業の「草」、これまでも草のお話はあれこれ書いてきましたが、今回はいちど取り上げたく思っていた「草のことば」について書いてみたいと思います。

草ことば考

矢谷左知子

「草」という言葉がなぜか好きだ。

草は長い間の仕事のパートナーでもあるが、日々の暮らしのなかでも常に草と居る。家周りでは、私が住むより前から住民である多様な自生の草を、良い加減で大切に見守り育てている。旬ごとに主役が移り変わっていく様はダイナミックであり、庭にはいつもかれらの繊細に波打つ気配が満ちている。人が手をくださす、という行為にも注意を払って、草の元の力をそがないようにしてきた。今、庭では草たちがいい具合に共生している。

草からは糸をつくり、染めにし、染織品や道具をつくり、お茶や日々の食の一品にもする。

草のつく言葉はそうした暮らしの中で、リアルに寄りそうものであり、折々に想いを寄せてもきた。

そこには、この国に住んできた人たちが草

にどのような意識を向けているのかがよく現れてもいて、それを知る時、なにか心身が緩むような心地になる。

この風土の人たちは、なぜ、草にそのような意味合いを重ねてきたのだろう。

今回は自分好みで拾い集めた、そんな草のことばを少し挙げてみたい。

「草分け」

何かの分野を新しく拓いた第一人者などを指す比喩として使われるが、これは私にとって、文字通りの意味合いとして実体験でつくづく、ほんとに沁みている肌感覚でもある。

実際に野生の草の採取を長年やっていると、目的の草を取るために、手前の絡み付く草たちを言葉の如く手や体で分けて、人が未踏の草叢へまさに分け入る、時にはダイブするシーンも多く、その度にこの言葉を思い出したりして可笑しくなる。この言葉を比喩でなく実体験し、草刈り機ではなく、体で草分けて、しかもその草を活かすために採っている人はそんなにはいないだろう、と。

私には身に染みついた、体で現す草言葉の筆頭かもしれない。

「草創」

これも好きな草ことば。

遙かむかし、神話の頃の空気感が漂う、壮大な拡がりを感じてしまうスケールの大きさがある。

それゆえ「我が社の草創期には」のような現世的な使い方は本来ふさわしくない、とさえ勝手に思ってしまう、イメージの膨らむ美しい言葉だ。

いつだれが創った言葉なのだろうか。

これら、草分け、草創、などに於ける「草」の意味合いは、始まりや先駆けというような使い方であるが、そこに草が紐付けされると、この国の言語感覚は興味深い。

「草案」「草稿」「草庵」

のような言葉にも、字面を眼にするだけでも寛いでしまう感あり、ラフ、本番前、というような、緊張とは逆向きのリラックス感が漂う。力んでいない。いいかんじだ。



↑今年の夏から秋に採取し、糸にした「葛」と「苧麻」

同じく

「草競馬」「草野球」

これらも、素人感満載で、のんびりしたその場の空気も伝わってくるような、ゆるやかさがある。

ことほど左様に、草という存在にこうした感覚を抱いてきた民族である。これは世界的にも興味深い感度ではないだろうか。

そもそも古事記には、元来、「人は草であった」と取れる言葉が書いてある。「民草」という言葉もある。

人と草は同じ存在だったという、そして草に対しては上記のごとく、やけにゆるゆるしたイメージを当てはめる、人と同列にする、そんな感覚を持てるなんてそれだけで日本人でよかった、と思ってしまう。

そして、生を終えた人は今度は「草葉の陰」に潜んでこの世界を見守るのだ。

重くない。軽く、流れる世界観。この風土が育んできた死生観、自然観は、なんだか軽やかだ。

この列島の土壌風土から生成される草は世界的にもダントツ多様性トップではなかろうか、だがしかし、である。現代に於いては草に対しての扱いはまったく地に落ちて幼稚と言える。

野の草は受難である、必要のないところまで丸刈りにされ、除草剤をかけられ、コンクリートで塞がれ、忌み嫌われ、あつてはならない存在と成り果てた。

多様な草の名前も役割も知る人はほぼ居ない、邪魔なものとして十羽ひとからげ、問答無用に伐ってうち捨てられている姿ばかり。

薬や生活用具のほとんどのものを、木や草などの植物でまかなってきた何万年の蓄積の中には、技術だけではない、草からの奥深いおしえがあり、人々はそれらに触れてきた。

今となつては、もはやそれも皆無といつていいほどだが、実はこうした言葉の中には、そこから受け取った智慧の源泉も潜みつつ生きていることだろう。

日本人の精神の中には、まだそれらは宿っており、いつか復活する日が来ると信じていた。

そして最後に、動植物との共生の世界観を現すべく想いを込めて創ってみた、自作の草ことば、

「草文明」

それをタイトルに使っている。